梅ごよみ

二編

へ 13
839
6

遺13へ門
號 839
巻 6

春色梅児譽美 巻の六

江戸　　狂訓亭主人作

明治三六年十月十八日購求

第十一齣

鳥一羽濡て生ろり朝接露戎舎〻此糸の客をまねく

て朝まだき元禁屋ゞ家ゞ小みすゞ表二階の廷酒ちり

ちゝしゝうる皿小鉢下へ持ゆ〻その跡ゆかの婦多川の米

八ゞ紙ゞ小ゆかね恋衣思ふ君せるにあるねぶも脱よたこ

ゝく此糸ゞ　モシ正米八さん　ありて色り私ゞ自まんを

愚賢いやさえ願がけをさせようこどの禁物と仏の誓
ておりイしゝゞあんまりよやあり イまめゝうそりやア成
わど義さえい男子のいゝゞふかをろ言もあゝゝらゞ
墨ぞうのようとけまゝろ私ゞ参ふ達引でこまでふ
ちこと信切と影いよちぎふありイしてあまりよやア
せんゝおいゝゝえエそりやアもりかと恨とおつ毒りま
てもゆゝもこれとへごれます甘ん今ゝゝ私ゞ恋のかうに
やてもえ推へこと言訳らしとゝゝ山でもあります甘う

けまでさゝゝそりこと訳がありますセショそりやア
まり初めうして表れた真を喝まる合点で世話をして
上エゝこのゞ私のおまりでございますゝゝそんも言ふまの
まして城ふ私ゞ清ません実よ多義さえのお供と
て爰まで来ゝ義さえおいゝえの所へお出ごとへ言
ごと言まこまでありますゝ門所へ遠言の私ゞ身
おいゝえエへ下へ形で言伝をまて堀の舟宿で延津賀
さえよ爰まして濱の宿へ濱て今朝義さえのお迎ひ

ごてうおいくんゆもお同よからうとやつてきて義さ
ら義さえいやめべ余所へお出で今モ帰りておきやひご
といふまて私ゆどクラーてぞうせうとやつてかりま
ゑえでどざいますのをそのやう義兄と重ねたさ
思まつ仏とでも言ふほトまたとヒ手紙よ
そのうらみ
ぞとハ思ひませんりまとまたと私ゲ身のムヤ
ぞのやうごとやしめすあの実ハ義さえのお影で身俗
小他所行も遠方のあいと丹さえとアイ達へおいくんかく人

さえのいくふいまとまたハ信切その姉ーさ小引ハてア
住ようと義さえゲ如小こことを拾ようと小日々の存義
と茅や舟宿宅へかつまどもお客の義さえもおくつまを方
ごろ義理と思ふの二道て情で塞ぐ恋の責動さの
ままねさー向へる請の出合をいろいろ所いつも義さえ
へハ五まろ広く思ハまてもおいくんへの義兄さく泣つ
口説つ言ねけまびまと舟宿の亭こまさえや損兄の義兄
兄人傳ようまとかハ品とハ系ぐろモウ思ぎりて殺とまて

ぬで八月三日さうあくとゝろの翌日翌夜多侍ふのいろど
信切よいそれて着てもッイちろ〻と逃るの出来沢
でいるゝいつも彩が突かくと乗相づゝーの来らんざ
色彩も悪もさあたてるふて寝のようにで二度二度
彩らといべ足よ来くてと部やくまでなづゝひの土産物
自ま人出居れの彩ぐ抱への子供のまくもあちすげ
あくすとべ已物が増えると落言いの見る胸の
ゝーさの初どいべ丹さんの貪苦をみちぐおいゝんの

情と他でゆくまでまいさうごすぐまいくへ息がもの
出まるあうと偷伽山への月春り妙見さ百千扁の
おぐいゝいくその日で浮と調子の弱慣を導くも
おいゝん挙きんのおいの八日小戒びいいるすす
ハあうませんョぐで今までのゆう小部あれふして
おくんるさんョト「光あんあんー
あやまりイーくほさろそうさハちくも炭さろぢり
義さんの足八遠ー便アとあーうぐひイちぐそん

あるべかめへふりがなを振ってあるへ蔦さえの麻ざんを
拙るのふ如在のるえい人ざるすぶ風と初ごうはるといふ
と其知へ一図ふふるえしふふるめが蔦さえの持ってあ文
でおりとあへ私もアアト言て跡といえずやふに此
おいえん愛門あへ蔦えへの世話ふふるまでいまだ趣
言のまぶるたせざるめるよへモシエトおるの耳中へそふ
ざまるるそまドるア半さしのるるとへアイサどうして
ゲイおるるへそれざるするるふるざえすトいいへるあ

めづて虫へゆうこり弟へ蔵ふ小家るの所へ気が法るる
おるるるモウいけるえと言ちやアあるませえよまるで
るの「おまえ」ちゆと拙あうぶで恢るイするやイエ蔦で
おりますョトいへ折るる此ふが形造いと花いるたせきと
二階へ走り行つ紙ふ書し物をいぶ花へ今拙行さえがお
いえふおげて全るとよまーイおまトみアどいぶた
おいえいるるえる拙たあぶる「はやとりやアいるものふ
遺イスれ花へ妙見さえのざるすしまへぶおませまるま

ヨトあふさりくまや二十四番であります子

二十四番	
天天天人地	
西有白虎靈	ゆーの方ふあるくあるもの身のこあふかりきこ
是邪悪神形	そまこふつのてかんるんとするるあーんあひあきこめく
家中不安穏	身しーけきもべー
万事何以寧	

このふまさ出てこ絡岸ハ何方ふ當りイすよ（てうど西ふあうますぐらん花（そまーでやアまさんがおいーんの

こふふ（ア）サ出づこふるる花（よ（おいーんへ行ぐ此節苦
労よあさのまするるが有ますのこ（この）十二今始まるこ
苦労ばかりあるイせんが私やアこんるおさくでハ姪ひ
ざまに今ハなとくりまくでもまゆハ嬉しいとこ苦ひが
とでくとこるこ楽ふもるりイすなまどが行ぐこにでやア
こりりイせん若人でハあくでも身のこふふるるこ
いこくあきこめられるくこるあーこ乳を様のハあイ
せん花（そうざまにこ初はるまーーとヤイ

きてふ　おいえん　古い吉よめ　ことゆすりるべ
おもえよ　ゆりけるさいまする　ヨトいくどおもへん　世界ハ胸
ふもとうてやひいる　恋の山　やいぐるの　行る浮川
竹のあぐまの　ものそも　頃城の　稔といつく　別よ　時る
畑も　あーこる　親る　兄弟の　こる小　苦界の　年のうち
色を　高く　ものとつく　用ゐても　月と日の　永い　勤
めふ　短夜の　種も　かぞへて　暁を　待夜も　あまべるべ
き夜の　鄙の　音恨む　床のうち　九分の　くるこ　一分の

響こそ　まこそ　男の　乳ふ　ようて　尽せー　情とあぐふ
生る　安くも　多くあ　あるるまべ　良まー　といつも　ゆろう
ある　嗟　慢　城　水　実る　ーとい　板橋　雑記の　情よりさ
らず　女郎の　終ハ　ハ　ようきまべて　こ　こ　三十
の上　こすも　であ　あぐけ　く　花　ふ　ふけの　ま
のぐ　花すて　折こ　の　風　情　あるぐ　真の　契　情の　ろ
して　素人の　操を　守る　と　日を　同ぎ　くして　いべ　ずず
必　竟　こすく　世　ぐ　憂　の　思　いつ　あ　ん　そ　弟

三編のもくめふ解べし　批評
著宦藤無倫　此ものがたりを作者自身中よ奇境をまうけ
てすきうおとてゝぬこをつゞべ「米八」「お蝶」「此
ものが実情」と三幅対とゝいふべき新奇のもの
隅田川発市の日をまゝ世のことわざのこ

第十二齣

八重といふ工女間ふ逗ゝ村の花をゝる時はあり
ぬぐゝまぐ春風のさそひずやお蝶とひのまゝにこゝろ
知つくゝるゝき今日の月ハ中の丹波布がゝあふ
ゝ奉ゆ沈魚落雁ゝ浄瑠璃とあり客も
竹蝶吉と呼かゝく月待日待よ招ゝ場の浄
うり夏きうのそも宮芝万が丹誠ふ仕あげゝ
蓬の間ゆどよく嶋田の髪をきゝて男に
対情が今幸ふの美髪化粧をゝと美ゝ
二階の窓よりで今宵よゝ見ゝお客の好

出ての後ふく一ぱいよ

まく婦ゆるしの物まいでも配膳が終わるまで
そりや家ゆさきだのはきこの時ぜんの酒ーや
ねせも金板ひんぬきとはやきたのもう者ーさぎ
ふぞとやふむらうまえ仏合いねまんできこの
まぐいのこるとまんまとやたが祝言ものもり
一ぱいそまゆまもるとはゆるんどもやとまいたで

見せびらかしてねまーこだうさ二人の婦れ何が能ろう
くみてもまえ沢へあけまぜ下種れ肉いまもうにな
らぶねもんで寄りとこを物けあとでいまこだ分せあげ
てさのどいおだせれ種は井戸つまきまえかノ
配る布をこてきこうのときうの身まえこす
ふるみれかい小梅いが物もあまきべとも。も
世いぶぶ世ぶ沒ねぶあと出ーい二祝ゆ別て
よりてまもまもまもも見物ふめ。

此家の主人老女にして阿といふる妻婦あり元へ
お去が実の新唐琴屋の二階にて法とめて老女
たりしが強欲非道の曲のみして日づゝの食
より利をむさぼる今はかぶく雪の下寮訪ひも
なりいとふ借宅して音曲の子供をかく渡世
とせしが此せつ手者のこゝろを見てくるよ帳を
とりくさのお蝶と二十五両ゆてかく法家へ立
いつせて祝儀をもらいすゝ芸稽業をいとすゝ

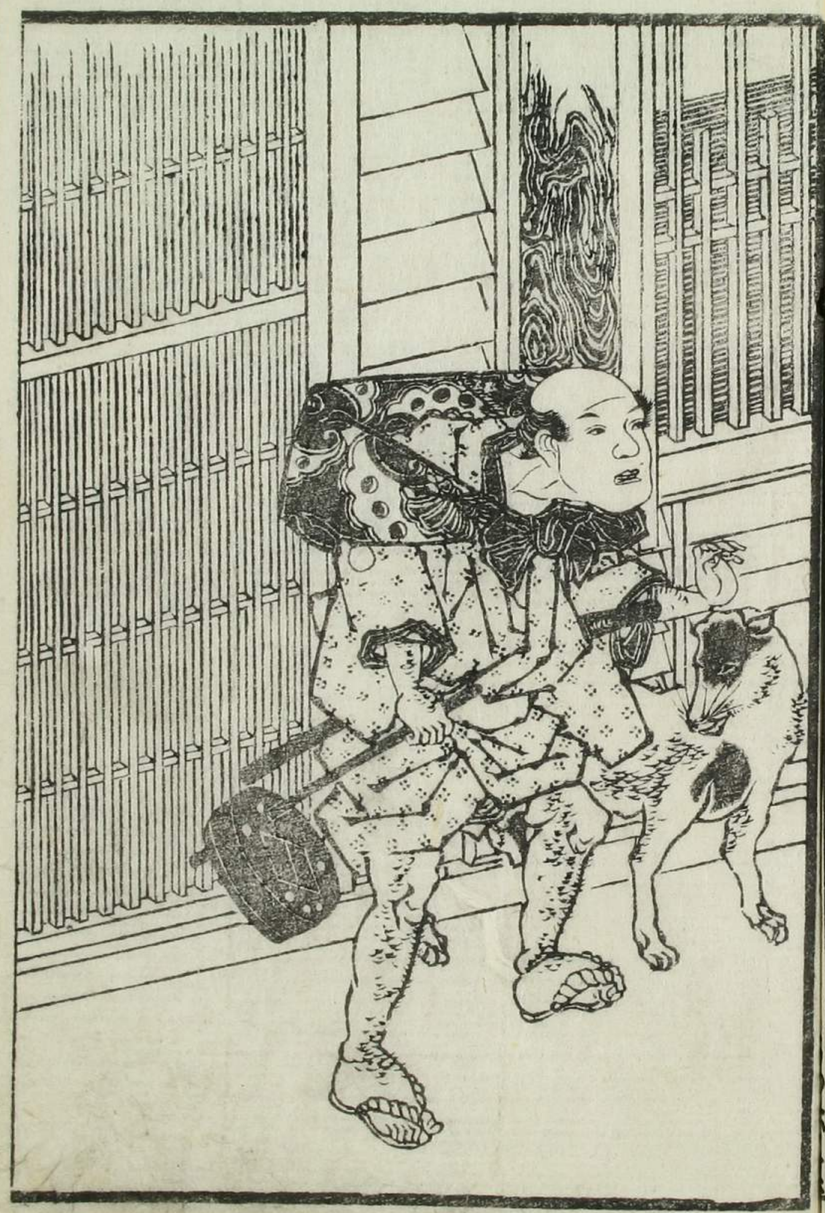
ろう（この金八丹ばかり方へ）おかりしとぞ
母とかーづきくその内老ハ主人と知を見朝夕
にぎやかに呼らくに慣さる諸の今とハいひ
ろうぐ抱へらく知りふを見ぞとゐづざりし
更へ居ぐ家のありふと言ずーてそのめーつひ
同ぜんふ有ります運の拙ろさを日夜よ歎く
もものび涙あの見ろるき世の中ろりお河老
女いいろぐまーく階子の段をとーきろぐ

く蝶吉くヨイつんぢうめコウお蝶ちやくきつけ
ちやすゆく
ち「おトびく」ち「いかげんふ空耳をたちうせエ
つんぢうめエち「ヨヤさろだろ初まき一あんぢち
モウ九ツグ時とアナいうぢうげんにしく支度をれく
うる麻くしいち「そまでも今日の出のハ私
グ語ろつけれくものぢうよく後つて行ろいと
こそるものヨち「ヨいそれくすうにがかられく
でみるときハさくくといのふうちぐして

居やアぐつくお面ーきくハ出るとろ座ーたがある
とろいのと足元ろ鳥の立てせうふさハぎやア
ぐろアいなでもおまとろ麻よしてあるろうざア
仮ふも駅ぐぢあんまりに返答をーろうヨぐ
俵ぐきてくいきてくせうふなもかもいれれく
きんぢんをきるぐいろぢうでもめくの芸ぐら
いで二十の三十のといく金の利合もきるのろ
そまぢろ尤文太さぢというけてそーぢを

あぐらをおかぐ例ふすりの多〳〵こうよくやる吉ろ
左文太さんはたそうに四門福ごといくるわ
万長でも笑さどやれくうそういく金のちが世
話をしてやらうといそ白ものを今ようて逆
るもせず。きゑんざきう洞ぐんで居るのろかぐ
かるこいかぐ年いのご不吉るも〳〵五今年で
後つく居ると長吉殺〳〵の所ぐあいまざ〳〵ツイ
涙ぐ出えでありますを〳〵ふりまめで語て

てるめてかるこいのっぐ人ぐその半ぶん
情のろりくかりあっいぐ廣場へ出して押あ
しっだぐ〳〵をくまる連も出集めくゆー
小そくかっ巨っ笑人へやびで湯ごらう
まざしも目曇ぐちがまんそくでその白い
ぐお仕あいせそれあ彼是人きぐこまやう
言てもくさるのざ蛇で立流ろ形へ出来
れくどかういくのもやめくの為ごかの今どこ



竹蝶吉吉五人男

石さらし屋

十人ばかりで且那の二人やこ人ぐらいがきられて
ばかりけがあるものうちへまどいおんお客を大切ふ
勧めて浄瑠璃を精出してませうがぐらぐら且那
をとるの左文太さんのお世話をするのといふ
るの堪忍しておくんなさいヨ へいんあやそう
いやう此方も言ばざまめ勝手を言ってちやま
ばかりわたくしコレ浄るりを語ってはいうぐらぐらあるで三十両
うの金を出すものがあるかと思ふうまきさの時

の用ばかり受ってある二枚の絵文且那ばかりや
あるまい恋が窟の部へかりて年一ぱい生涯故
ばかりのうちの中で苦界をするも亦ようらう
且那へいやざもかさくしい アレサ母さんもう
よいこれ出ばけふ小言をおいいぐさし
きにかうくばざいきの機嫌もそうゆくいヨ へ
にでうしやるもうゆくいの往ぐどいヨ。ヨウふこ
言をいふと後ってこと身で居るが大かと其方の腹

の中ぢやア元主人ごといへ気ごらうがそりやア
あるえど六七年いぜんふたしろ一年ゐどよんど
ころあく新手ちく唐琴やの女郎衆の世話
して居と時ゆあ〜ごがゆも奉公人ときまろて
勤めて居やア〜れへョこく仕すぎと昔がらよい
りのうちへ一私がそんなるを出して居やあ
ませんョトいふへいんどゆへいとといへも
あまりなるお阿が雑言婦とえよ迫るなごの

たく〜折〜表の格子戸あけ武家の使と
こへこる男へイチトおたのこヤまます梶原の中き
う〜参りまし〜と蝶吉さんの迎ひでござりました
ゑへハイ〜こまへモウ大きふ段ざ場ざ及ヤョ蝶吉
さんく支度をし〜れへうマアお茶でもあげませう
今日ハお客さん及ハ大ぜいさるでござりますす
ぐ一ツイお客より芸者の方が沢山でござり
ます 桜川善好 桜川新好 湯又 話家でも

龍調ふ桁橋清元でハ志ほ太夫ふ壽女太
夫延沸賀踊アとでハ西川扇義義太夫ち
此方のお蝶さえふ小でん伊でもアア大さうとぎ
さア多へまゃくそうやアアアおりろうらうれ仕へイやく
きぐあるへハゝゞ且那のゆくゑいきの婦多川
の米八梅次トいふおりうゝお蝶ハちくゝして二階
ようおりきうこと三をゆくゝ米八さえとあう
もお出ぐとろへ多アそんあるをきくゝより

うきをものでもれへゆうふゝろさあうあゝモシ
どうぞお那ひゃゝます〳〵余所のゑ共と
遠つく気ゞ付れへでとまり切ます仕ナニサお母そう
言ゐさえゐ娘子共のできこそこうのおばこゐ方ゞ
かとゝゝくとてようどぐろます〳〵ゃせう子ち〳〵
いりて来ります仕〳〵さあうゐゝゃぐうで今日ハ盆
夜ふゐりますョゐ〳〵それハ有ぐゝふお蝶ちゃつけれへ
ち〳〵と安ゐ風俗ハ梅我ゝまさう愛敬良上ゐハなで

京清七子上羽の蝶の菅笠後下ゑハ角地紫よ大
きく染ー丁子菱縮緬の衿ハ白綾ホ朱紅で書画
の印ばく袖ハ緋麻子帯ハ黒びろうどホ紅のよまる
のくぐり仕立ちつも同ホくろ三升格子[illegible]の腰帯ハ
おもゑど白茶の金ちうる勿論巾ハ一寸三分五分でも透ね流
行ホ形ちぶん有る若元髷げホ姿ちまどぶもお蝶ゞ
身にへつぼ一ホ有るそで染まぬ品も浮世うきくるゑ庄
春色梅児誉美六ヲ